

文芸

俳句

夏落葉掃く音を聞く古利かな 池田 逸子
 涼新た仰ぐ夜空の航路下 伊藤 敬子
 長き夜や肩摩りつゝ明けを待つ 今関満喜子
 稔り田を渡りくる風黄金色 魚地 照子
 昼寝妻小さくなりしとふと思う 川島 通則
 盆栽の葉裏に鳴くや青蛙 向後 寛
 朝の氣に心づくしの秋は来ぬ 越川せつ子
 雑草へ宿る白露や風に散る 小松 藤男
 波音や白砂青松蟻地獄 佐瀬 輝夫
 新秋の牧の馬の目寂しかり 椎名万里子
 地域燃ゆ子らの声沸く盆踊り 市東富美江
 草むしる昭和生れの婆は素手 鈴木とし子
 沢山のされど桃色秋桜 鈴木 利子
 刈田から刈田へと鷺移りゆく 玉虫 栗扇

轟音と埃の舞ふや稲刈れる 土屋美枝子
 背負籠に土付き野菜蟬しぐれ 土屋 義昭
 舗装路の途切れしあたりカンナ燃ゆ 早川 勇
 浅草の寄席にどせうに夏惜しむ 藤田 雅夫

短歌

嫁ぎ行く娘の荷のごとく出荷米 越川 義則
 積みしトラックしばし見送る 雷雨去り呼び合うごとくみんなの 蝉鳴き出すや背山にぎわふ 内藤 くに
 老いの身をいたわりながら強く生き 病む妻残し先には逝けず 伊藤 定男
 逢へばまた別れがあると思ひつつ 見送る笑顔こみあぐる老い 高梨 キヨ

教え子の三十歳になる故と 同窓会の通知がとどく 浅野 榮子
 実家へと向かう国道綿雲と 菊田の中のコンビ二一つ 椎名美枝子
 ラジオ体操八十路の友も励めるや 音に合はせて大きな手を振る 押尾 輝子
 夕風に木槿の花が揺れてゐる 籠りし熱気放ちるるがに 八角 三枝
 朝早く茶の間に届くコンバイン 稲刈りの音絶えなくつつく 加瀬 弘子
 ちぎり絵の鬼灯朱くあかくして 亡友の夫君に夏見舞だす 西山満里子
 野良仕事素手になしたる日日のあり 皺みたる手の甲を擦りぬ 青木 秀子
 ひと言も話さぬ今日は吾からに 夕べとなりて娘に電話せり 田崎 尚美

.....
 送り火の時刻となりて門先に 線香点すも名残惜しかり 鈴木まさ子
 白き花咲くかに見えて近寄れば 草の葉に蝶翅ふるはせり 水須 俊

み仏の帰り来るとふ夜を飛ぶ 白き蝶に見る亡夫のまぼろし 芹川 初子
 登校の黄の帽子の児独り行く 仲間外れでなければよいが 斎藤つね子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

10月 涼風生花クラブ
 11月 (展示なし)

◎文化会館ロビー展

10月 アートクレイクラブ
 11月 (展示なし)

◎サビア展

10月 アート押し花クラブ
 11月 俳句会

◎銚子商工信用組合展

10月 華舟会
 11月 (展示なし)



平安時代の緑色の器

芝崎遺跡群で、奈良・平安時代の住居跡や畑跡が多数発見され、様々な遺物が数多く出土した。その中でも一際目を引いたのが、緑色の釉を付けた焼き物であった。この時代の遺物の大半は、素焼きの土器で、赤茶けた色をしていて、土にまみれるとあまり目立たない。それが緑色で艶のある焼き物が土の中から出たときは、宝石のように輝いていた。



▲芝崎遺跡出土の緑釉陶器碗

この焼き物は、まるでそのものを表わすがごとく『緑釉陶器』と呼ばれ、今の愛知県瀬戸市付近で焼かれたものである。元々中国の青銅器、あるいは青磁を模して造られたもので、当時としては最先端の技術で焼かれた高価な焼き物で、めったに手に入るものではなかった。それが芝崎遺跡群の芝崎・中島遺跡で数多く出土したのである。そこは掘立柱建物跡が多数見つかるとが考えられ、この地域の中であったことが想像される。十月十一日から町民ギャラリーにて、『考古資料で見る横芝時代』が開催されます。ぜひ、ご覧ください。(社会文化課 道澤 明)